

叫ぶ／描く

2016年4月16日は、不安で、居ても立ってもおられない一日だった。

どうしようもなく胸騒ぎがして、一週間前に完成させた作品をジェットで黒く塗りつぶした。

そしてチタニウムホワイトの無数のストロークを画面にこすりつけた。

画央でカドミウムレッドの心臓が震えている。

赤は不安と恐怖の象徴だ。赤は悲鳴だ。

僕はこの日、熊本で起こった天変地異に本能的に感応し、絵筆を持たずにはいられなくなった。

創造にすがりつき、祈るように、叫ぶように、ひたすら赤を塗りたいかった。

やがては赤絵具が切れてしまったが、そこには “顔” のようなものが掘り出された。

これは、怯えきって、疲れ果てた、僕の横顔、僕の叫び。

絵画になった僕の「叫び」は、果たして皆の「叫び」にもなただろうか・・・。

多くの人々が不安に苛まされているこの時代に、絵を描くということは、こういうことなのだ。

西村一成